

ミャンマー軍政の「王都」、ネーपीドー（特集 途上国の首都機能移転）

著者	工藤 年博
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	142
ページ	12-15
発行年	2007-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047129

特集／途上国の首都機能移転

ミャンマー軍政の「王都」、ネーピドー

工藤年博

ミャンマー最後の王朝コンバウン朝の創始者アラウンパヤー王が、ダゴンを占領し、宿敵モン軍を撃破したのは一七五五年であった。ビルマ史上三度目の統一王朝を打ち立てた国王は、この地をヤン（敵）がコン（尽き果てる）という意味の「ヤンゴン」と改称した。しかし、コンバウン王朝はその後三度におよぶイギリスとの戦争に敗れ、一八八五年に滅亡する。最後の国王テイーポーは王都マンガレーの王宮の鬼門から連れ出され、インドへと流された。

その後、植民地政庁はヤンゴンを行政、軍事、経済の拠点と位置づけていく。ヤンゴンは小さな漁村から、ミャンマーの首都へと発展を遂げる。ミャンマー人が敵を討ち滅ぼし全国統一を成し遂げた記念の地が、植民地支配の拠点となったのは歴史の皮肉である。

今、ミャンマー軍政はその恨みを晴らすうとしているのであろうか。軍政は植民地期の面影を色濃く残すヤンゴンを捨て、国の中部に新首都の建設を開始したのである。

●突然の遷都

二〇〇五年末、突然、表面化した中部ミャンマーの小さな町ピンマナへの遷都計画は、実現不可能との大方の予測を裏切り、同年一月には実行に移された。一九四八年にミャンマー独立の日時を占星術師の占いによって選んだ慣例によったのであろうか、今回も彼らの御託宣に従い、一月六日の日曜日、早朝六時三十分きっかりに、前日に引越しを申し渡されたばかりの九省庁の公務員を満載した第一陣のトラックが、ピンマナへ向けヤンゴンを出発した。翌七日、チョーサン情報相は、行政機能を円滑にするために、政府機能の中枢を移転するだけ説明した。また、当面、外国公館に移転を求めるつもりはないとも発言した。

ピンマナは近郊の村々を含めても約二〇万人程度の小さな町である。旧首都ヤンゴンと旧王都マンガレーを結ぶ幹線道路沿いに位置しているものの、道路の整備状況は悪く、ヤンゴンから車で七〜八時間を要する。電話、ファックス、メールなどの通信事情も劣悪である。政府庁舎や職員住宅、生活関連インフラも、現在は徐々に整いつ

つあるものの、まだまだ不十分である。このような状況にあつて、ピンマナへの移転が行政機能に深刻な影響を与えるであろうことは、誰の目にも明らかであった。

さて、その後正式な発表はなかつたものの、国内の新聞やテレビは新首都をネーピドー（ビルマ語で「王都」の意味）と呼称し始めた。二〇〇六年一月一日、チョーサン情報相が同国の首都はネーピドーであると発言し、ようやく新首都の名前が確認された。また、公式な首都移転日が同年二月一七日であったことも判明した。軍政は自らを王として、「王都」を建設したのである。

●軍政の狙い

突然の遷都は内外の関係者に驚きと困惑をもたらした。遷都計画を知らなかつたアメリカやタイは、今もヤンゴンに新たに大使館を建設中である。タイ政府はミャンマー軍政が新大使館の建築許可を下ろした直後に、遷都を発表したことに困惑を隠せなかつたといわれる。近隣諸国への通告もない徹底した秘密主義による移転計画は、自

国民はもとより国際社会からも軍政の奇行と受け止められた。

遷都の理由は占星術師の御託宣に従っただけとの噂が、まことしやかに囁かれた。しかし、遷都という大プロジェクトを軍政の奇行と片づけてしまっわけにはいかないだろう。やはりそこには軍政なりの論理があるはずである。いったい彼らの狙いは何なのだろうか。

第一に、外国メディアやアナリストは、米国の武力行使に対する軍政のパラノイア的恐怖が要因であると指摘している。米軍が海から侵攻してきた場合、ヤンゴンはずぐに占領されてしまうが、山深いピンマナを拠点としていればゲリラ戦で反撃できるという。端から見れば、アメリカのミャンマー侵攻は馬鹿げた妄想にすぎないが、軍政首脳の間では現実的な脅威として想定されているという。アメリカによるパナマ侵攻（麻薬問題）、ボスニア・ヘルツェゴビナ空爆（民族問題）、イラク侵攻（大量破壊兵器、人権・民主化問題）において開戦の口実を与えた問題の多くを、ミャンマー軍政は抱えているからである。

しかし、米軍の侵攻への対抗策か否かとはともかくとして、国内治安の維持という戦略的視点からみれば、上ビルマ、下ビルマ、シャン州の結節点に位置するピンマナに軍の拠点を置くことは、意味があるのかも知れない。実は国軍総司令部をピンマナに置く構想は以前よりあり、今回の行政組織の

移転の前に、すでに国軍の中枢機能は当地に移されていたのである。

第二に、将来的な国軍の権力維持を狙った動きとの指摘もある。軍政には一九八八年の大衆蜂起の鮮烈な記憶がある。この時、民主化を求めて荒れ狂う大衆デモにより、政府機能は完全に麻痺してしまった。軍政は今もヤンゴンでの大衆暴動の発生を怖れている。そこで軍政は、ピンマナに政府組織を移転することで、再びヤンゴンで大衆蜂起があった場合でも政府機能を維持し、権力を保持できる体制を構築しようとしているのだ、との見方である。国土を二分しても国軍の地位を守る。遷都はこうした国軍の意思表示とも映る。

第三に、今回の遷都は国際社会に対する国軍の意地を示すものであると指摘する人もいる。ミャンマー軍政は、民主化運動の指導者であるアウンサン・スーチーの軟禁を続けるなど人権・民主化問題を抱えており、これを理由に国際社会の厳しい批判に晒されてきた。軍政が遷都を強行する直前二〇〇五年七月には翌年に予定されていたミャンマーの東南アジア諸国連合（ASEAN）議長国への就任が、欧米諸国の反対によって辞退に追い込まれた。一九九七年に国際社会への本格復帰を目指して加盟したASEANであったが、それさえも国際社会の批判から自分たちを守る盾とはならなかった。軍政は国際社会に対し、深い失望と憤りを覚えたに違いない。彼らは国際

社会に背を向けた。しかし同時に、自らの力を誇示するかのようになり、新首都建設という一大プロジェクトを敢行したのである。

第四に、遷都という大プロジェクトを実施する財源を軍政が獲得した点が重要である。それは外資による天然ガス開発の成功によってもたらされた。同国の海底天然ガス田は一九九〇年代後半に開発がすすみ、二〇〇一年から隣国タイへの輸出が本格化した。天然ガスによる外貨収入は、二〇〇六年には二〇億ドルを超え、ミャンマー全輸出の約六割を占めるに至った。この収入はミャンマーの外貨事情を大きく改善した。とくに、天然ガス収入は全てが国有企業を通じて国庫に入る仕組みとなっていることから、国家財政は潤った。新首都建設という大プロジェクトは、こうした資金を元に実行に移されたのである。

●新首都探訪

首都移転が始まってからも、新首都への訪問は、とくに外国人に対しては、厳しく制限されてきた。ミャンマー軍政がネーピドーを本格的に海外に公開したのは、二〇〇七年三月二七日に新首都で開催された第六二回国軍記念日の式典に際してであった。軍政は記念式典を取材させるため、日本や欧米などの報道関係者約四〇〇人に滞在許可を出したのである。この時初めて、ベールに包まれていた新首都の様子が海外に紹介された。



写真1：建設中の市庁舎（2006年12月6日、筆者撮影）

筆者はこれ以前の二〇〇六年二月にネーピードローを訪問する機会を得ている。ここでは、その訪問記を紹介しよう。

ピンマナはヤンゴン⇨マンダレーを結ぶ国道一号線沿いに位置している。ヤンゴンからピンマナ市内までの距離は、走行した車のメーターで計って約三〇〇キロ。道路は対面二車線の区間が多く、舗装状況は良好とは言えない。しかし、私が最後に走った四年前と比べると、だいぶ改善されたとの印象を受けた。それでも、おそらく洪水によってであろうが、舗装が流されている箇所が所々に見受けられた。この年の雨期は洪水が頻発し、農作物も大きな被害を受けたとのことで、その傷跡が残っていた。新首都への道のりは、通常、ヤンゴンから行くとピンマナの町の手前で左折し、新たに建設されたアクセス道路を使うことに

なる。アクセス道路を左折して行政地区までは、約六キロの距離である。但し、筆者は前日ピンマナの製糖工場に宿泊していたため、今回は別のアクセス道路を使うこととなった。こちらの道は元々バゴ山脈を越える街道であったが、新首都へのアクセス道路として拡幅舗装されたのである。この他にも新首都では道路建設が急ピッチで進んでおり、周辺地域の交通アクセスはある程度改善されつつある。

しかし、主要都市と新首都を結ぶ公共交通網は極めて未発達である。例えば、ヤンゴンからネーピードローへ行く場合、普通の公務員やビジネスマンは、バスか列車を使う。長距離バスは毎日運行されているが、道路状況がよくないため約一〇時間を要する長旅となる。列車は日に二便しかなく、こちらも八〜九時間かかる。途中、少数民族反乱軍の出没する治安の不安定な地域を通るため、以前はあった夜行便は、現在は中止されている。このため、許可の必要なビジネスマンがネーピードローへ行く場合、行きに一日、申請に一日、帰りに一日の三日を要してしまう。許可を受領する場合も同様である。しかも、例えば商業省は輸出入許可の手続きにおいて、代理申請を認めていない。実際に輸出入をする会社の社員が、ネーピードローまで行って手続きをしなければならぬのである。

空路で行く方法もある。ヤンゴン⇨ネーピードロー間は、最近では毎日飛行機が飛ぶよ

うになった。但し、外国人あるいはドル払いで搭乗しなければならない乗客の場合、片道七〇ドルと高く、しかも最寄りのエラ空港から新首都まで車で三〇分強離れている。空港にはタクシーもないため、事前に車の手配をしておかなければならない。便のキャンセルも多いという。やはり、お金はかかっても、自家用車が借上車両で行くのが、最も確実な方法と言えそうである。さて、新首都へ向けて工場を出発した筆者は途中ピンマナ市内を通過した。驚いたことに、町は人と車でごった返していた。私が四年前にこの町を訪れた時は、本当に田舎町という風情であったので遷都の影響は明らかであった。

新首都へ向かう道路は、あちらこちらで工事が行われていた。しばらく走ると、右手に建設中の市庁舎が見えてきた（写真1）。新首都の知事には、既に国境地域少数民族開発相のティンニョン大佐が任命されているが、市庁舎の建設は移転に間に合わなかったようである。さらに、一〇分ほど走るとチャップイー村に到着した。ビルマ語でお化け（チャップ）も逃げる（ピエー）と言われるほど辺鄙な田舎の村は賑やかな町へと変貌を遂げつつあった。

ここを過ぎると、まもなく大きなラウンドアバウトに到着した。この交差点がネーピードローを行政地区、住宅街、宿泊施設などに分割する基点となっている。まずは宿泊施設の区域へと向かった。二〇分ほど走



写真2：同じかたちの建物が並ぶ住宅街（2006年12月6日、筆者撮影）

ると、左手に建設中のコテージ・タイプのホテルが見えてきた。すでに稼働しているクムドラ・ホテルを訪問すると、外国人のグループが宿泊していた。部屋数は二八部屋、料金は二二〇ドル（四人用）、七〇ドル（三人用）、四〇ドル（二人用）と、ヤンゴンの高級ホテル並の値段である。それでも、この日は満室とのことであった。

ホテルから引き返して、今度は行政地区を目指した。行政地区へ行く道は本当に閑散としている。行政地区内に入っても各省庁の建物がぼつりぼつりと散在しているだけで、時々車は通るものの、人通りは全くない。各省庁の間はとも歩ける距離ではないし、山の中にあるので自転車でも行き来は困難である。車やオートバイがなければ、書類一つ届けられない「官庁街」であった。

●役所と公務員

二〇分ほど走ると、目的の省庁に到着した。関係部署の部屋に入ると、そこには旧知の友人達が勢揃いしていた。筆者は二〇〇二年にヤンゴンのこの役所で仕事をしていたが、その時の同僚が（移転したので当たり前ではあるが）そこにいたのである。

事務所の雑然ぶりはヤンゴンにいた時と同じである。外を歩いている人が全くいない異様な空間の中に、懐かしいミャンマーの役所の雰囲気再現実されていた。一瞬、ヤンゴンの事務所がそのまま移動してきたような錯覚にとらわれた。しかし、考えてみればこれは錯覚ではなく、実際に、机も椅子も電灯もコンピューターも書類も、そして人もそっくり移転してきたのである。

ミャンマーの役所には女性スタッフが多い。彼女達の多くは一人で、突然の首都移転によってこの地にやってきた。こんなところ（と言っても新首都であるが）で再会すると、感慨深いものがあった。移転してきた当初の劣悪な状況に比べて、だいぶ落ち着いてきた様子ではあったが、仕事場と共同生活に近い宿舎との往復の生活で、しかもほとんどの人がヤンゴンの家族と離れて単身赴任しているのだから、不満がないはずはない。住宅街（写真2）を走ってみたが、同じような建物が並ぶだけで、ミャンマー人の愛するラペツイエー・サイン（ミャンマー版喫茶店）一つない。それで

も、「仕事に集中できるのがネービーロードの強みだ」などと冗談を言うミャンマー人を見てみると、本当にこの人たちの忍耐強さに感心する。私は日本から持って行ったインスタント・ラーメンを置いて、今度はヤンゴンで会おうと言って、お別れした。

●軍政の王都

ピンマナの町を通過して、さらに国道一号线をマンダレー方向に北上すると、ほどなく国道を右折する八車線の舗装道路が忽然と現れる。道路の入口には物々しく警備する軍人が数人立っている。この道はミャンマー版ペンタゴン（国軍総司令部）へのアクセス道路である。

車上から、遠く八車線道路の先に、巨大な建物群をうかがうことができる。全省庁を巻き込んだ今回の遷都は、先に述べたとおり、元々は国軍総司令部の当地への移転がきっかけであった。この建物群がヤンゴンで一緒に仕事をした同僚たちをこの地に連れてきたのかと考えると、軍政の「意地」と、それに振り回される人々に思いが至った。

二〇〇七年九月、統治二〇年目に入るミャンマー軍政は、新たに手にした「王都」で、どのような国家建設を夢見ているのであろうか。

（くどう としひろ／アジア経済研究所
地域研究センター）